

第二百六話 敵軍の見た日本兵！

手元に、一冊の新書がある。帝国陸軍については人それぞれに様々なイメージを持っている。本書は、敵であった米陸軍の視点での“日本（陸）軍・日本兵”のイメージである。首肯できる面もあれば首を傾けたくなるイメージもある。

「日本軍と日本兵 米軍報告書は語る」 一ノ瀬俊也 講談社現代新書から

1 米陸軍が見た日本軍と日本兵

同書に示されているイメージ語彙等を列記すれば以下の通りである。

- ・ファナティック(狂信的)な非合理性の軍隊
- ・日本兵超人説
- ・白兵突撃主義
- ・万歳突撃
- ・空疎な精神論
- ・歩兵主兵主義
- ・攻撃偏重の軍隊
- ・ワンパターン
- ・自発性・自主性希薄
- ・形式主義
- ・体罰
- ・個人射撃は下手だが、射撃規律は良好
- ・体格について(略)
- ・肉体的には頑健
- ・接近戦に及び腰：銃剣術の突き一本槍で銃剣格闘なし
- ・獣のように食べ、食べかすは床に投げ捨てる(食堂は不潔)
- ・時々中隊全ての将校と下士官兵が酒盛り、大きな輪、強かに飲むetc
- ・将校と兵は同じものを食べる。
- ・靖国神社：都会と田舎者の間に温度差あり
- ・(日本陸軍は、ムラ社会そのもの、公よりも仲間内での「私」情優先)
- ・戦争末期には、日本陸軍の戦術戦法が一定の成果を上げた。
- ・びっくり箱陣地(秘匿陣地で敵通過後背後から攻撃)や蜘蛛の穴陣地(対戦車人間地雷)に驚愕

2 総括 同書「おわりに一日本軍とは何だったのか」から引用(245p)

『以上、戦闘組織としての日本陸軍の組織・戦法を、米陸軍という敵——他者の視点に立つことで解明を試みてきた。日本陸軍とはかつての日本に生きた人々とその貧しい国力を直接反映する鏡であったともいえるが、それはどのようなものだったのか。

米陸軍広報誌 Intelligence Bulletin の描いた日本兵たちの多くは「ファナティック」な「超人」などではなく、アメリカ文化が好きで、中には怠け者もいて、宣伝の工夫次第では投降させることもできるごく平凡な人々である。上下一緒に酒を飲み、行き詰まると全員で「ヤルゾー」と絶叫することで一体感を保っていた。兵たちは将校の命令通り目標に発砲するのは上手だが、負けが込んで指揮官を失うと狼狽し四散した。

それは米軍のプロパガンダに過ぎないという見方もできようが、私はたぶん多くの日本兵はほんとうにそういう人たちだったのだろう、と思っている。その理由は、彼らの直系の子孫たる我々もまた、同じ立場におかれれば同じように行動するだろうと考えるからだ。』

3 私見

如何なる軍と雖も、敵そのものを含む作戦戦闘に関する教訓を随時収集して、それを活用するものである。米陸軍軍事情報部が部内向けに毎月発行していた「戦訓広報誌」は、敵側から見た日本陸軍が如何なるものであったかを知るうえで興味深い。当初は、日本兵超人説を払拭することに主眼が置かれていたようだが、次第に冷静な観察眼で日本兵を見つめ、浮き彫りにしている。勿論、ある特定の戦場におけるある観察者の目が全て正しい筈がなく、日本陸軍・兵の全貌を捉えているとは思えないが、一面の真理は示していると考えて今後の参考とすることも必要だろう。

本来弱い存在である人間が、戦場と云う極限状況下において、それを克服し任務に邁進するためには、単なる敵愾心や復讐心ではなく、集団心理でもない、もっと根源的なものが必要なのだろう。敵に対する侮蔑・侮りを必要以上に強調するのではなく、逆に必要以上の恐怖心を抱かせることもない方法で戦士を育成することが必須だ。

(第二百六話 了)

日本軍と日本兵

米軍報告書は語る

一ノ瀬俊也



講談社現代新書
2243